

親子の似より感と結びつき

——家族イメージ法を用いた分析——

秋 山 幹 男

Similarity and Cohesion between Female Student and her Parents

——An analysis by Family Image Method——

Mikio Akiyama

1974年からスタートした研究は、この30年間試行錯誤しながらではあったが、1990年頃から「似より感とズレ感」というキーワードを立ち上げらせ、親子の似より感という研究の流れを確立させるところまで到達してきている。親子関係を観ていくための新しい接近法が姿を見せ始めてきていると言っても過言ではない。また、2000年～2002年の間に構築した『似よることとズレること』をベースにした自分なりのパーソナリティ形成理論（人生を三段階で捉えていく）が、この一連の研究に対してさらに大きな目標を持たせることになった。それは、この親子の似より感研究が対人認知の発達に結びつけられるという思いが強まったからである。少なくとも、その人の対人関係の在り方を決めるものの一つにこの親子の似より感の心内化における発達差が位置づけられるという気付きである。この考え方は、ボウルビーに始まる愛着スタイル（内的作業モデル）ともひと味違った研究アプローチのように思える。これまで積み上げてきた研究は、人生の第②段階から人生の第③段階に一貫して焦点を当て続けたものである。誕生から児童期までの研究は、今でも多く母子関係を中心になされているので、あえて青年期以後の親子関係に絞ってきたのである。人生の第①段階における自己（私）認知は、まわりから似よることを求められ、それを受け入れながら形づくられてきたと大まかに見なした。これを踏まえた上で、思春期から始まり出す人生の第②段階を取り上げ、他者との似よりとズレが同時進行で私という自己認知に影響を与えている（いく）と受け止め直した。

ここ100年近くフロイトの同一視で解釈され続けてきている自我／自己や、エリクソンに始まる青年期の同一性による自己の再確認と自己への自信を一緒にして一つの考えの中に取り込むには、この人生の第②段階から人生の第③段階にかけての研究に基づく詰めが大切であると思う。人生の第①段階における自己形成の多くは、周りの大人を中心とした人々から「お前はこうなんだ」という形で示され、それを無意識の内に取り込んできたもの（似よることを求められ続ける時期）であった。これに対して、人生の第②段階は、“自分でも今までの私ではない心の変化（自己）に何となく気づきだした”ことをその始めとするのである。本当の意味での自分探しの旅の開始である。そこでは当然これまで周りから言われ続けている自分とは違った受け止め方（〈私〉）が生じてくる。だからこそ、エリクソンの「同一性」概念が生き生きとした自己主張を始める。似よるだけではないズレの感じ取り方の誕生である。ここで、しばらくは忘れ去られがちになってきた心理学用語を思い出さなければならない。それは、二昔位前まで青年心理学がその特徴として現象学的に記述してきた「反抗」と「憧憬」である。この言葉のもつ深い意味がここでは重要なものとして再浮上するのである。視点を変えて考えるなら

ば、これがズレの成せる心の動き（意識水準での）なのである。本来的な意味での私のスタートである（これを〈私〉とした）。

年々長くなる青年期ではあるが、この時期に形成されていく自己（〈私〉）が、ある程度の自信とあきらめを自覚できるようになると、いよいよ壮年期を迎える。似よりとズレを味わいつつ、いまや他人と少しではあるが、ズレることも恐れなくなる心とその姿を現してくるようになる。いよいよ個性化の時代への〈私〉の参入である。この人生の第③段階ではユングの研究の蓄積が重みを増す。「無意識をも取り込んだ全体性の回復」がそれである。さらに、この延長線上に、円熟期に向かう心、つまりフランクフルトやウィルバーが掴み取ったさらなる人間の心の発達についての解釈も位置づけられる。そこでは、似よりつつズレながら築き上げてきた自己（〈私〉）が、そのものささえも超越するのである（《私》の誕生）。これは自然（じねん）との融合であり、ここまで到達できるとするならば、再び新しい似よりが始まったと捉えることも可能になってくる。《私》はまさに大きな命に支えられ生かされている存在者であるという実感と喜びの世界に入る。30年という研究の歩みは、牛歩のごときものではあったが、やっとこのように先が見通せるところ（峠）まで辿り着いたようである（但し、まだ十分なる思索を練り上げたものではありえないのだが...）。

秋山（2003a）は、両親の実父母との似より感がどの程度家族認知に影響をもたらすものであるかを調べた。家族認知とはいっても、子どもの一人（一貫して女子学生）と両親の関係性である。実父母と自分は似ているという認知をしている者が二人で家庭を築き上げている場合（区分③の項目数が多いと判断した夫婦同士）、逆に、実父母と似ていないと受け止めている者同士が結婚し家庭を維持している場合（区分③の項目数が少ない）は、娘によってなされた認知でも多くが同じような判断であった。両親のそれに似ているのである。これに対し、実父母との似より感が夫婦の間で違っている場合（組み合わせが大と小あるいは小と大）には、娘の多くが父親の似より感に近いという結果がでてきた。この研究からは、娘（女子学生）がどのように自分と父親の関係を認知しているかが、その後の対人関係に影響を与えるのではないかという問題が提起される。これは、幼児を持つ若い母親を対象にした、実父母との似より感の違いが子どもの性格認知や養育態度に影響を与える（2000）や、女子学生を持つ母親の実父母との似より感が、家族をみつめるそれと同じになる場合が多かったという結果（2003a）からは、推測し引き出す（見いだす）ことのできなかった貴重なもの（事実）である。

本研究では、卒論指導や修論指導の中からその姿を見せるようになった、家族イメージ法をもとにした親子の結びつきと似より感研究とのかかわり方を取り上げてみたい（柴田 1991, 岡田 2002, 下井 2003）。家族イメージ法は、岡堂（1983）が「家族システムをもちいた家族への心理的援助」の中で示した図から誕生した（家族の人間関係の臨床的な特徴を、グリックとケスラーが治療的な目標に沿う形で示した図である）。それは、機能充実型・分離型・ひずみ型・世代の断層型・仮性民主型・解体化型と名付けられたイメージ画であった。われわれは、この図をもとにしながら家族の結びつきを4つの線のいずれかで示してもらおう形に変えてみることにした。これまで続けて来ている学生の家族関係（親子関係）をみる別の物差しにしようと考えたのである。家族の結びつきを簡単に描ける方法として、まずは柴田（1991）が最初の調査を実施した。続いて、秋山（1995）は学会発表を行った。以後、ゼミ生がこれを卒論や修論の一部に取り込みながらまとめてきている。この度は、この家族のイメージ画の中から父-母-私（女子学生）という三者間の結びつきだけを取り出し、これまで蓄積してきた親子の似より感とどのようにかかわり合うかを詳細に検討してみることにした。親子の間（三者間）での結びつきが強いか弱いかというイメージ的判断（図示）と、娘が評定した親子の似より感3群や

親子の認知タイプとの関係を明らかにしたい。さらにその上に、複合的な分析を定着させるため、時間軸と空間軸にそった自己の定位（自己意識）とこの親子の結びつきをも絡ませてみる。この分析法は2002年からスタートさせたもので、これまでの論文にまとめてきたものの一つをもう一度新しい調査の中にも組み込み、親子の似より感研究の信頼性を高めるというやり方である。分析が冗長になる危険性を孕んではいるが、より研究を強固なものにするためこの重ね合わせるという方法を今回も採用する（2001, 2002）。

本研究の目的

人生の第②段階の研究（似よりつつズレる時期）

1. 親子の似より感3群と家族イメージ法をもちいた親子の結びつきのかかり方をみる。
2. 親子の認知タイプと親子の結びつきとの関係をみる。
3. 親子の結びつきと時間軸と空間軸にそった自己の定位（自己意識）の関係性を調べる。

人生の第③段階の研究（ズレることにウエイトのかかった時期）

4. 親子関係をみる新しい視点（「手入れ」という養老の考え方と「仕掛けて待つ」の合一化他）を立ち上げる。

方 法

対 象 者 女子学生317名のデータを入手したのだが、その中で親子の似より感と結びつきの関係性の分析に使用できたのは265名、時間軸と空間軸にそった自己定位と結びつきでは224名であった。5回の調査に基づいているが、いずれも3年生である。

実施年月 1992年12月と1993年12月は、青年心理学の授業中に実施した。①親子の似より感と家族イメージ法の調査（104名／88名）：1992.12.7./1993.12.6. ②時間軸と空間軸からみた自己の定位の調査（105名／83名）：1992.12.14./1993.12.13.

2000年と2001年のデータは、12月の冬休み直前の授業時に封筒に入れて配布し、翌年1月の授業時に回収する方法を取った（49名／51名）。

2002年は、心理学演習Ⅱの時間に調査を実施している。親子の似より感調査は4月26日、家族イメージ調査は5月24日であった（25名）。

調査内容 [調査①] 4つの人格認知因子（F1 内向性12項目、F2 自己顕示性9項目、F3 誠実性14項目、F4 明朗性7項目）とその他よりなる48項目の性格調査を使用する。評定の対象は、「自分自身」「母親」と「父親」である。同じ48項目の調査用紙を対象ごとに頁をめくりながらチェックしてもらう。各項目は5段階で評定を求められる（資料参照）。

[調査②] 岡堂（1983）の中に転記されていたグリックとケスラーの図を参考にして作成された家族イメージ「私と家族」は、Fig.1のようなシートを調査用紙に組み込んでみた。相互間の結びつきを4つの線のいずれかで図示してもらうものである。

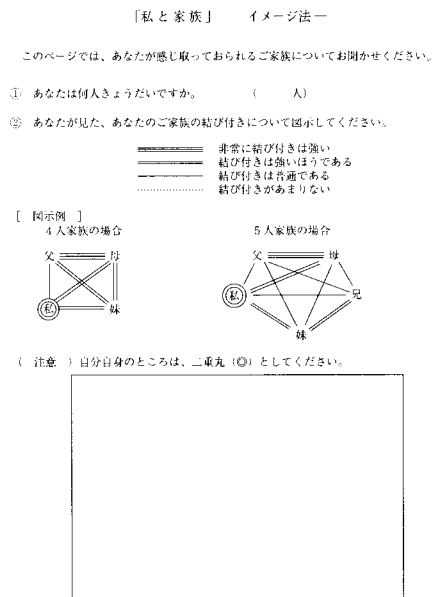


Fig. 1 家族イメージ法の記入用紙

〔調査③〕 時間軸からみた自己の定位は、加藤（1983）の同一性ステイタス抽出の12項目を使用している。3つの時期における課題を背負った項目である（各時期4項目）：過去の危機、現在の自己投入、将来における自己投入の希求。空間軸からみた自己の定位は、梶田（1988）の自己評価的意識30項目のうち因子分析をし直した17項目である：F1自己受容（8項目）、F2自己防衛（6項目）、F3他者受容（3項目）。この29項目に1項目を加えてランダムに配置した6件法の調査用紙を作成した（資料参照）。

データの処理 [1] 1.「親子の似より感」3群の抽出：2001年よりその他の6項目を除いた42項目で群を分けている。群分けは、5段階の評定を3段階に簡素化させる。非常にそう思うとそう思うを「はい」、そう思わないとまったくそう思わないを「いいえ」とする。どちらとも

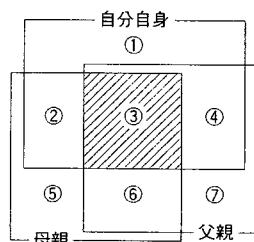


Fig. 2 七区分表示図

もいえない(?)の回答は外してカウントせず、「はい」と「いいえ」で回答された項目を七区分表示図の中に入れていき、区分③に納まった項目数の多少で3群に仕分けた。

2. 評定対象三者の性格：4つの因子について因子別得点を出す。因子を構成する項目の得点を加算し、項目数で割った値である。得点は5.00～1.00の範囲に納まる。

[2]「家族イメージ法」：この中から、親子の三者関係を抽出する（きょうだい関係や祖父母との結びつきは今回は取り上げない）。父親-母親-私（女子学生）の結びつきは4種類の線で描いてもらった。そのため分析が複雑になるので、この度は、結びつきの強さを2種類の線に絞り簡素化することにした。非常に結びつきは強い（3本線）と結びつきは強い方である（2本線）を、まとめて「結びつきが強い」（2本線）とした。結びつきは普通である（1本線）と結びつきはあまりない（点線）を、込みにして「結びつきが弱い」（1本線）と見なす。これで大きく3種類の分類（「三者ともに結びつきが強い」、「両親の結びつきは強いが、私と父親とは弱い（母親とは強い）」と「その他」）が可能になる。このうちの「その他」は、さらに両親の結びつきは「強い」と「弱い」に分かれるのであるが、両親と私とのかかわり方をこれに付け加えると複雑になり細分化されるので、今回はそこまで深くは分析しないことにした。

[3]「時間軸と空間軸から見た自己の定位」：ランダムに呈示されている調査項目から各々の項目を選び分け、それぞれの得点をだしていく。時間軸からみた自己の定位は4～24点の範囲で、空間軸からみた自己の定位では1.0～6.0の間で得点化が成された。

結果と考察

人生の第②段階の研究：親子の似より感と結びつき

1. 親子の似より感3群について

七区分表示図の区分③に納まった項目数で3群の抽出が行われた。

似より感大群 17項目（個）以上

中群 16～9項目（個）

小群 8項目（個）以下

全体（265名）の「はい」と「いいえ」の項目数の平均とSD、七区分における平均項目数とSD、ならびに、3群における3つの評定対象ごとの4つの人格認知因子の因子別得点の平均とSDは、Tab.1-1, 1-2のごとくである。対象人数が多いため（265名）、これまでの研究と同じくはっきりとした差が得られている。今回は、3評定対象のいずれかにおいて「はい」と「い

親子の似より感と結びつき

いえ」の項目数の合計が20個未満になった者は除外された（その該当者は23名であった：これまでの分析では小群の構成員となる人達）。

Tab. 1-1 3 評定対象の平均出現項目数と七区分でみた項目の平均出現数 (単位 個)

| | | 「はい」・「いいえ」の項目数 | | | 七区分ごとの項目数 | | | | | | |
|-------|-----------|----------------|------|------|-----------|-----|------|-----|-----|-----|-----|
| | | 自分自身 | 母親 | 父親 | 1 | 2 | ③ | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 全体 | \bar{X} | 32.8 | 34.2 | 34.5 | 8.5 | 6.1 | 12.6 | 5.7 | 7.8 | 7.7 | 8.5 |
| N=265 | SD | 5.6 | 5.3 | 5.5 | 4.8 | 3.7 | 6.9 | 3.7 | 4.6 | 4.3 | 4.4 |

Tab. 1-2 3つの評定対象ごとにみた親子の似より感3群と全体の因子別平均得点とSD

| 評定対象 因子 | 似より群 | 自分自身 | | | | 母親 | | | | 父親 | | | |
|---|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 |
| 大 | \bar{X} | 2.99 | 2.92 | 3.68 | 3.93 | 2.45 | 2.54 | 4.07 | 3.93 | 2.25 | 2.72 | 4.11 | 4.04 |
| n=79 | SD | 0.53 | 0.59 | 0.42 | 0.51 | 0.50 | 0.74 | 0.50 | 0.60 | 0.59 | 0.83 | 0.48 | 0.64 |
| 中 | \bar{X} | 3.27 | 3.13 | 3.31 | 3.39 | 2.54 | 2.62 | 3.78 | 3.63 | 2.51 | 3.06 | 3.68 | 3.37 |
| n=99 | SD | 0.53 | 0.64 | 0.47 | 0.60 | 0.53 | 0.71 | 0.52 | 0.58 | 0.57 | 0.85 | 0.59 | 0.73 |
| 小 | \bar{X} | 3.40 | 3.33 | 3.00 | 3.22 | 2.72 | 2.80 | 3.67 | 3.37 | 2.63 | 3.13 | 3.36 | 3.31 |
| n=87 | SD | 0.47 | 0.54 | 0.48 | 0.59 | 0.53 | 0.65 | 0.48 | 0.64 | 0.61 | 0.88 | 0.74 | 0.69 |
| 1 要因分散分析 | | ** | ** | ** | ** | ** | | ** | ** | ** | ** | ** | ** |
| 大 vs 中 | | * | * | * | * | * | | * | * | * | * | * | * |
| 大 vs 小 | | * | * | * | * | | | * | * | * | * | * | * |
| 中 vs 小 | | | * | * | | * | | | * | | | * | |
| 多重比較：テューキー法 (P<0.05) ** P<0.01 * P<0.05 | | | | | | | | | | | | | |
| 全体 | \bar{X} | 3.23 | 3.13 | 3.32 | 3.50 | 2.58 | 2.66 | 3.83 | 3.63 | 2.47 | 2.98 | 3.70 | 3.55 |
| N=265 | SD | 0.54 | 0.61 | 0.53 | 0.64 | 0.53 | 0.71 | 0.52 | 0.65 | 0.61 | 0.87 | 0.68 | 0.76 |

完全2要因分散分析では、「群間」で4因子の総てに有意差が出ている。「評定対象」については、F4 明朗性が傾向あり (P<0.10) となったが、それ以外では有意差があった。なお、群と評定対象の交互作用は、F3 誠実性においてのみ5%で有意差が得られた。従来の分析方法である1要因分散分析と多重比較の結果は表の下に付記されている。似より感3群の特徴は、より鮮明な形で従来の結果（出方）を裏付けている。多重比較はテューキー法 (P<0.05 に設定) を使用した。

これからは、いよいよ本研究の主なる目的である親子の似より感と親子の結びつき（家族イメージ画より抽出）とのかかわり方を詳細に追究していくことにする。

2. 親子の似より感と親子の結びつきとのかかわり方

親子の結びつきは大きく3種類に分けられたが、「その他」はさらに両親の結びつきが「強い」（2種類）と「弱い」（4種類）の2種6タイプで構成されている。娘である私が捉えた三者間の結びつきは、この度は大きく8種類でまとめ上げることができた（265名のデータ）。これを、似より感3群と合計の出現数で表したものが Tab. 2-1 である。家族イメージ画は4つの線で描かれたので、実際にはもっと種類が多くなり多彩であった。そこで、その総ての表し方を8種類別に仕分けし、表にしてまとめてみた (Tab. 2-2～2-5)。

Tab. 2-1 親子の結びつきと似より感3群の
かかわり方 (単位 人)

| 親子の結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 | 計 |
|-------------------|-----------|----|----|----|-----|
| 三者間の結びつきは強い | 父=母 私 | 50 | 43 | 22 | 115 |
| 両親の結びつきは強いが、父とは弱い | 父=母 私 | 19 | 30 | 25 | 74 |
| その他 | 両親の結びつき強い | 3 | 4 | 4 | 11 |
| | 弱い | 3 | 8 | 11 | 22 |
| | | 1 | 1 | 7 | 9 |
| | | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | | 2 | 8 | 12 | 22 |
| | | 1 | 5 | 5 | 11 |
| n=76 | | | | | |
| 計 | | 79 | 99 | 87 | 265 |

Tab. 2-4 その他①

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 |
|------------|-------|---|---|---|
| | | 2 | 4 | 3 |
| | | 0 | 0 | 1 |
| | | 1 | 0 | 0 |

Tab. 2-5 その他②

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 |
|------------|-------|---|---|---|
| | | 0 | 0 | 1 |
| | | 0 | 0 | 1 |
| | | 1 | 1 | 4 |
| | | 0 | 0 | 1 |

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 |
|------------|-------|---|---|---|
| | | 2 | 5 | 4 |
| | | 1 | 3 | 3 |
| | | 0 | 0 | 3 |
| | | 0 | 0 | 1 |

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 |
|------------|-------|---|---|---|
| | | 1 | 2 | 3 |
| | | 0 | 2 | 4 |
| | | 0 | 1 | 2 |
| | | 1 | 0 | 2 |
| | | 0 | 3 | 1 |

Tab. 2-2

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 | 計 |
|------------|-------|----|----|---|----|
| | | 16 | 9 | 3 | 28 |
| | | 8 | 9 | 4 | 21 |
| | | 3 | 2 | 1 | 6 |
| | | 18 | 10 | 9 | 37 |
| | | 0 | 1 | 3 | 4 |
| | | 3 | 6 | 2 | 11 |
| | | 2 | 6 | 0 | 8 |

Tab. 2-3

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 | 計 |
|------------|-------|---|----|----|----|
| | | 6 | 4 | 1 | 11 |
| | | 9 | 10 | 11 | 30 |
| | | 0 | 1 | 1 | 2 |
| | | 3 | 5 | 8 | 16 |
| | | 1 | 7 | 2 | 10 |
| | | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | | 0 | 3 | 1 | 4 |

Tab. 2-2 ~ 2-5

実際の親子の結びつき
のイメージ画
と出現数

| 内訳 結びつき | 似より感群 | 大 | 中 | 小 |
|------------|-------|---|---|---|
| | | 0 | 0 | 1 |
| | | 1 | 3 | 3 |
| | | 0 | 1 | 0 |
| | | 0 | 1 | 1 |
| | | 0 | 0 | 1 |

「三者間の結びつきは強い」の占有率は43.4%,「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い。母親とは強い(以後母親とは強いを削除する)」27.9%で全体の7割強を占める。「その他」に入れた結びつきは、合わせると28.7%となり約3割弱の出現であった。女子学生たちは、「両親と私」の関係性について実に興味深い捉え方をしている。特に「その他」の存在は、臨床的に見ても貴重な存在者のように思われる。これらの表を見つめると、細かく一つひとつ(一人ひとり)を丁寧に見比べてみたい衝動に駆られる。しかし、それは今後の課題ということにして、まずは娘の捉えた親子の似より感と親子の結びつきとのかかわり方に焦点を当て、大まかな分析に入りたい。Tab.3は、3種類の親子の結びつき(「三者とも結びつきが強い」、「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」と「その他」)に分けて、似より感3群の12の因子別得点の平均とSDを表にしたものである(自分自身:F1~F4, 母親:F1~F4, 父親:F1~F4)。

1要因分散分析の結果を読み取ってみよう。「三者間の結びつきが強い」:3つの評定対象とも似より感3群の間ではF3とF4においてのみ有意差を見させていることがわかる。「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」:母親と父親のF2自己顕示性を除いた10の因子で差を示している。「その他」:5%の有意差になるものが主であるが自分自身では総てにおいて、父親ではF2~F4において差がでてきた。これに比して、母親の認知では4因子とも差がみられなかった。一方、3群をベースにして3種の結びつきとの関係をみた場合、1要因分散分析と多重比較の結果は次のようになった(有意差ありを取り上げている)。

自分自身ではF3誠実性(大群:①vs③)

母親のF3誠実性(大群:①vs③)とF4明朗性(中群:①vs③)

親子の似より感と結びつき

Tab. 3 3種の結びつきごとにみた似より感3群の3評定対象における因子別平均得点とSD

| 評定対象 結びつき群 | | | 自 分 自 身 | | | | 母 親 | | | | 父 親 | | | |
|------------------|-----|-----------|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 |
| 父=母 私 | 大 | \bar{X} | 3.09 | 2.99 | 3.76 | 3.96 | 2.43 | 2.47 | 4.14 | 3.93 | 2.29 | 2.75 | 4.22 | 4.15 |
| | 50 | SD | 0.48 | 0.57 | 0.40 | 0.51 | 0.52 | 0.70 | 0.45 | 0.59 | 0.62 | 0.85 | 0.45 | 0.66 |
| | 中 | \bar{X} | 3.23 | 3.14 | 3.39 | 3.52 | 2.60 | 2.60 | 3.91 | 3.74 | 2.48 | 2.95 | 3.83 | 3.62 |
| | 43 | SD | 0.54 | 0.52 | 0.44 | 0.56 | 0.56 | 0.63 | 0.46 | 0.55 | 0.61 | 0.77 | 0.56 | 0.70 |
| | 小 | \bar{X} | 3.24 | 3.30 | 3.02 | 3.35 | 2.74 | 2.78 | 3.56 | 3.42 | 2.49 | 2.71 | 3.68 | 3.53 |
| 22 | SD | 0.62 | 0.65 | 0.58 | 0.42 | 0.49 | 0.58 | 0.48 | 0.66 | 0.67 | 0.69 | 0.50 | 0.62 | |
| 父=母 私 | 大 | \bar{X} | 2.86 | 2.82 | 3.63 | 3.89 | 2.43 | 2.54 | 4.14 | 4.05 | 2.18 | 2.81 | 3.93 | 3.90 |
| | 19 | SD | 0.63 | 0.62 | 0.32 | 0.44 | 0.40 | 0.73 | 0.39 | 0.51 | 0.40 | 0.75 | 0.45 | 0.53 |
| | 中 | \bar{X} | 3.33 | 3.08 | 3.21 | 3.29 | 2.43 | 2.47 | 3.72 | 3.69 | 2.48 | 3.18 | 3.60 | 3.19 |
| | 30 | SD | 0.55 | 0.71 | 0.52 | 0.61 | 0.46 | 0.58 | 0.45 | 0.44 | 0.57 | 0.90 | 0.47 | 0.61 |
| | 小 | \bar{X} | 3.49 | 3.44 | 2.95 | 3.18 | 2.75 | 2.65 | 3.82 | 3.50 | 2.63 | 3.28 | 3.40 | 3.49 |
| 25 | SD | 0.39 | 0.55 | 0.46 | 0.69 | 0.26 | 0.54 | 0.36 | 0.47 | 0.49 | 0.87 | 0.58 | 0.60 | |
| その他 | 大 | \bar{X} | 2.78 | 2.75 | 3.39 | 3.80 | 2.62 | 2.91 | 3.64 | 3.71 | 2.25 | 2.39 | 3.92 | 3.80 |
| | 10 | SD | 0.43 | 0.54 | 0.52 | 0.61 | 0.52 | 0.81 | 0.66 | 0.73 | 0.69 | 0.81 | 0.51 | 0.62 |
| | 中 | \bar{X} | 3.26 | 3.16 | 3.27 | 3.31 | 2.56 | 2.84 | 3.65 | 3.37 | 2.58 | 3.11 | 3.52 | 3.14 |
| | 26 | SD | 0.50 | 0.71 | 0.42 | 0.60 | 0.53 | 0.89 | 0.61 | 0.69 | 0.50 | 0.90 | 0.69 | 0.79 |
| | 小 | \bar{X} | 3.43 | 3.30 | 3.02 | 3.18 | 2.70 | 2.90 | 3.63 | 3.27 | 2.70 | 3.27 | 3.15 | 3.09 |
| 40 | SD | 0.38 | 0.47 | 0.43 | 0.60 | 0.65 | 0.73 | 0.51 | 0.70 | 0.62 | 0.91 | 0.86 | 0.71 | |
| 1 要因 分散 分析 | | | | ** | ** | | | ** | ** | | | ** | ** | |
| | | ** | ** | ** | ** | ** | | ** | ** | * | | ** | ** | |
| | その他 | ** | * | * | * | | | | | | | * | * | * |

父親のF2自己顕示性（小群：①vs③）、F3誠実性（小群：①vs③）

F4明朗性（中群：①vs②、①vs③）（小群：①vs③、②vs③）

註、①：三者間の結びつきが強い ②：両親の結びつきは強いが、父親とは弱い ③：その他

3. 親子の結びつきと3評定対象の4つの因子別得点（平均とSD）の出方について

3種類に仕分けした結びつきのうちの「その他」を、ここではさらに両親の結びつきが「強い」（2種）と「弱い」（3種）に分けてまとめているもの（9名から22名の出現あり）も取り上げて分析してみることにした。「両親の結びつきは弱い。私は父親と結びついており、母親とは弱い」という認知をした学生は1名いたのだが、ここでは除外させてもらった。

12の因子別得点の平均とSDを親子の結びつき（7群）でみたのが、Tab.4である。完全2要因分散分析からは、4つの因子において群間に有意差が出ていた。3評定対象間ではF4明朗性に差がみられなかった。交互作用は、F2自己顕示性とF3誠実性において1%の有意差がでた。12の因子ごとの1要因分散分析と多重比較の結果は、表の下に付記した。

「自分自身」については、両親の結びつきが強いという第1群と第2群、第1群と第4群間に有意差がでた。自分と父-母との結びつき方の違いが、F3誠実性とF4明朗性に現れている。

「母親」では、第6群と第7群とくに後者のユニークさがF2～F4の因子で浮上している。第7群は、F2自己顕示性では高得点（第6群も）となり、F3とF4では有意に低い得点であった。これは「両親の結びつきが強い」（第1群・第2群）との間での差である。F2では第4群とも差をみせた。第1群（「三者間の結びつきは強い」と第2群（「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」）は、親子の似より感大群の特徴を多くもっている人が多いようである。

「父親」はどうだろうか。娘の認知はここで複雑化してくる。両親の結びつきが弱いとされる第5群と第7群が注目になる。特に、父親との結びつきが弱いとした第5群の娘は、F2か

Tab. 4 7種の親子の結びつきからみた3評定対象の因子別平均得点とSD

| 評定対象 因子 結びつき n | | | 自 分 自 身 | | | | 母 親 | | | | 父 親 | | | | |
|---------------------------|---|-----|-----------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | | | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | |
| 1 | ≡ | 115 | \bar{X} SD | 3.17 0.54 | 3.10 0.58 | 3.48 0.53 | 3.68 0.57 | 2.56 0.55 | 2.58 0.66 | 3.94 0.51 | 3.76 0.62 | 2.40 0.63 | 2.82 0.80 | 3.97 0.55 | 3.83 0.72 |
| 2 | ≡ | 74 | \bar{X} SD | 3.26 0.58 | 3.13 0.68 | 3.23 0.52 | 3.41 0.67 | 2.54 0.42 | 2.55 0.62 | 3.86 0.44 | 3.72 0.52 | 2.45 0.54 | 3.12 0.87 | 3.62 0.54 | 3.47 0.65 |
| 3 | ≡ | 11 | \bar{X} SD | 3.03 0.41 | 3.07 0.47 | 3.08 0.37 | 3.36 0.78 | 2.60 0.73 | 2.96 0.95 | 3.72 0.51 | 3.71 0.82 | 2.27 0.55 | 2.56 0.79 | 3.84 0.54 | 3.57 0.71 |
| 4 | ≡ | 22 | \bar{X} SD | 3.45 0.37 | 3.16 0.56 | 3.13 0.41 | 3.19 0.60 | 2.64 0.55 | 2.46 0.63 | 3.72 0.37 | 3.33 0.68 | 2.59 0.59 | 2.85 0.85 | 3.60 0.47 | 3.44 0.52 |
| 5 | ≡ | 22 | \bar{X} SD | 3.12 0.58 | 3.14 0.69 | 3.23 0.55 | 3.40 0.53 | 2.49 0.53 | 2.73 0.47 | 3.83 0.59 | 3.38 0.71 | 2.74 0.51 | 3.60 0.95 | 2.97 0.90 | 2.82 0.84 |
| 6 | ≡ | 9 | \bar{X} SD | 3.31 0.46 | 3.12 0.48 | 3.16 0.55 | 3.48 0.48 | 2.54 0.56 | 3.36 0.69 | 3.49 0.39 | 3.38 0.60 | 2.54 0.71 | 2.91 0.46 | 3.56 0.81 | 3.25 0.71 |
| 7 | ≡ | 11 | \bar{X} SD | 3.40 0.39 | 3.36 0.60 | 3.13 0.40 | 3.12 0.75 | 2.93 0.47 | 3.38 0.89 | 3.31 0.63 | 3.07 0.64 | 2.71 0.68 | 3.37 0.91 | 3.07 0.87 | 3.05 0.75 |
| 1 要因分散分析 | | | | | ** | ** | | ** | ** | ** | | ** | ** | ** | |
| 多重比較 テューキー法 (P<.05) | | | | | 1 vs 2 | 1 vs 2 | | 1 vs 7 | 1 vs 7 | 1 vs 4 | | 5 vs 1 | 1 vs 2 | 1 vs 2 | |
| | | | | | 1 vs 4 | 1 vs 4 | | 2 vs 7 | 2 vs 7 | 1 vs 7 | | 5 vs 3 | 1 vs 7 | 1 vs 5 | |
| | | | | | | | | 4 vs 7 | | 2 vs 7 | | 5 vs 4 | 3 vs 7 | 1 vs 7 | |
| | | | | | | | | 1 vs 6 | | | | | 5 vs 1 | 5 vs 2 | |
| | | | | | | | | 2 vs 6 | | | | | 5 vs 2 | 5 vs 4 | |
| | | | | | | | | 4 vs 6 | | | | | 5 vs 3 | | |
| | | | | | | | | | | | | | 5 vs 4 | | |

らF4までの因子で差を見せた。自己顕示性は高く、誠実性と明朗性は低いという認知者である。なお、第7群の三者間の結びつきは弱いという認知者(11名)も第1群と差を見ている。同じく11名と少ないのであるが第3群(「両親の結びつきは強い。父親との結びつきは強いが、母親とは弱い」)と比べてもF3誠実性で有意に低得点であった。ここでの分析からは、第5群(「両親の結びつきは弱い。私と父親との結びつきは弱く、母親とは強い」)がクローズアップ化してきたと言えよう。十分注目に値する結果である。

4. 親子の結びつきと親子の認知タイプとの関係性について

親子の認知タイプの研究では、これまで5つの純型を取り出してきた。

三者共通(C)型：区分③の項目数が多い。似より感大群の者のみ。

父母接近(P)型：区分⑥と区分①に多くの項目数が入る。似より感中・小群の者。

母子接近(M)型：区分②と区分⑦の項目数が多い。似より感中・小群の者。

父子接近(F)型：区分④と区分⑤の項目数が多い。似より感中・小群の者

個性(I)型：区分①・区分⑤・区分⑦に項目が分散している。似より感小群の者のみ。がそれである。いずれもこの度は、平均+0.5SD以上の項目数を基準として型を抽出した。純型の合計123名は、全体からみると46.4%の占有率となる。以前にも触れたことではあるが、複合型を合わせてもデータのすべてを分析の対象にすることはできない(これが、似より感にシフトさせた原因である)。Tab.5は、5つの純型からみた3評定対象の「はい」と「いいえ」の平均項目数とSD、七区分における項目数の出方(平均とSD)を示したものである。各々のタイプ(群)の特徴が分かりやすい。

親子の似より感と結びつき

Tab. 5 親子の認知タイプ（純型）からみた3評定対象と七区分の平均出現項目数とSD
(単位 個)

| 親子の認知タイプ n | | | 「はい」「いいえ」項目数 | | | 七区分内項目数 | | | | | | |
|------------|----|-----------|--------------|------|------|---------|------|------|------|------|------|------|
| | | | 自分自身 | 母親 | 父親 | 1 | 2 | ③ | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 三者共通 (C) | 39 | \bar{X} | 35.4 | 36.3 | 36.8 | 4.9 | 4.4 | 23.1 | 3.1 | 3.6 | 5.2 | 5.4 |
| | | SD | 4.8 | 4.4 | 4.3 | 2.6 | 2.1 | 4.6 | 2.0 | 2.2 | 2.8 | 2.6 |
| 父母接近 (P) | 29 | \bar{X} | 32.8 | 34.0 | 34.0 | 15.6 | 4.5 | 9.4 | 3.3 | 5.7 | 14.4 | 6.7 |
| | | SD | 5.5 | 5.7 | 4.9 | 4.8 | 2.2 | 4.6 | 1.8 | 2.4 | 3.3 | 2.7 |
| 母子接近 (M) | 17 | \bar{X} | 34.4 | 37.8 | 36.0 | 5.8 | 13.7 | 9.9 | 5.2 | 8.5 | 5.8 | 15.2 |
| | | SD | 5.0 | 2.9 | 4.3 | 2.2 | 2.7 | 4.2 | 1.8 | 3.4 | 2.7 | 3.9 |
| 父子接近 (F) | 32 | \bar{X} | 31.9 | 33.5 | 35.0 | 7.0 | 4.4 | 8.5 | 12.0 | 14.3 | 6.3 | 8.3 |
| | | SD | 5.2 | 4.8 | 4.2 | 2.9 | 2.5 | 3.9 | 3.0 | 3.6 | 2.7 | 3.8 |
| 個性 (I) | 6 | \bar{X} | 29.6 | 29.6 | 30.6 | 14.6 | 6.5 | 4.5 | 4.0 | 11.8 | 6.8 | 15.3 |
| | | SD | 2.7 | 2.9 | 3.9 | 3.1 | 1.5 | 2.6 | 1.3 | 1.6 | 1.9 | 3.1 |

Tab.6においては、この親子の認知タイプと3種の親子の結びつきの関係を取り上げた。また、Fig.3は、「その他」(37名)における総ての父-母-私の結びつき方を5つの認知タイプに分け、描かれたままを図で示したものである。

Tab. 6 3種の親子の結びつきと親子の認知タイプ（純型）のかかわり方
(単位 人)

| 認知タイプ | | C | | | P | | M | | F | | I |
|-------|-----|----|----|---|----|---|----|----|---|---|---|
| 結びつき | n 群 | 大 | 中 | 小 | 中 | 小 | 中 | 小 | 中 | 小 | 小 |
| | 51 | 22 | 6 | 4 | 6 | 1 | 7 | 4 | 1 | | |
| | 35 | 11 | 7 | 2 | 2 | 2 | 4 | 3 | 4 | | |
| その他 | 37 | 6 | 8 | 2 | 2 | 4 | 5 | 9 | 1 | | |
| 計 | 123 | 39 | 21 | 8 | 10 | 7 | 16 | 16 | 6 | | |

両親の結びつき
「その他」 C型 (大6) : 強い:弱い=3:3
P型 (中7・小2) : 中 3 2 小 2 中 強い:弱い=9:1
M型 (中2・小4) : 中 2 小 4 強い:弱い=0:6
F型 (中5・小9) : 小 2 中 4 小 2 強い:弱い=2:12
I型 (小1) : 強い:弱い=1:0

Fig. 3 5つの親子の認知タイプにおける「その他」の現われ方と両親の結びつき(2種)の比

M(母子接近)型とF(父子接近)型の学生では、両親の結びつきが弱いという認知をしている者が圧倒的に多いのが目に付く。F型においては、父親との結びつきが弱いという図が12名によって描かれていた(F型の「その他」14名は、この認知タイプ者の43.8%を占めている)。この5つの認知タイプを構成している者の12の因子(3評定対象×4因子)の出方(平均得点とSD)は、Tab.7-1のごとくである。

完全2要因分散分析の結果は、認知タイプ(群)では、4因子の総てで有意差が見られている。3つの評定対象は、やはりF4明朗性で差がでない。交互作用は、F3誠実性で5%の差が得られた。12の因子ごとの1要因分散分析では、母親のF1とF2を除いた10因子において有意差

Tab. 7-1 親子の認知タイプ（純型）で捉えた3評定対象の因子別平均得点とSD

| 評定対象 | | 自 分 自 身 | | | | 母 親 | | | | 父 親 | | | |
|----------------------------------|-----------|---------|--------|--------|--------|------|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 認知タイプ | | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 |
| C 型 | \bar{X} | 2.94 | 2.76 | 3.74 | 3.91 | 2.47 | 2.49 | 4.11 | 3.94 | 2.29 | 2.69 | 4.08 | 4.04 |
| | SD | 0.49 | 0.53 | 0.45 | 0.58 | 0.55 | 0.60 | 0.47 | 0.61 | 0.60 | 0.92 | 0.45 | 0.65 |
| P 型 | \bar{X} | 3.55 | 3.33 | 2.94 | 2.97 | 2.40 | 2.59 | 3.74 | 3.56 | 2.41 | 2.60 | 3.75 | 3.41 |
| | SD | 0.47 | 0.62 | 0.46 | 0.60 | 0.45 | 0.79 | 0.49 | 0.71 | 0.50 | 0.80 | 0.54 | 0.64 |
| M 型 | \bar{X} | 3.34 | 3.06 | 3.42 | 3.65 | 2.78 | 2.74 | 3.82 | 3.63 | 2.49 | 3.14 | 3.35 | 3.21 |
| | SD | 0.47 | 0.62 | 0.42 | 0.40 | 0.63 | 0.88 | 0.71 | 0.67 | 0.62 | 1.08 | 0.80 | 0.84 |
| F 型 | \bar{X} | 3.49 | 3.52 | 3.05 | 3.24 | 2.68 | 2.95 | 3.60 | 3.43 | 2.92 | 3.58 | 3.16 | 3.11 |
| | SD | 0.52 | 0.54 | 0.51 | 0.71 | 0.58 | 0.57 | 0.45 | 0.64 | 0.65 | 0.87 | 0.83 | 0.91 |
| I 型 | \bar{X} | 3.68 | 3.11 | 2.75 | 3.29 | 2.83 | 2.85 | 3.44 | 3.33 | 2.43 | 2.72 | 3.49 | 3.69 |
| | SD | 0.30 | 0.74 | 0.51 | 0.37 | 0.47 | 0.63 | 0.40 | 0.63 | 0.54 | 0.53 | 0.37 | 0.53 |
| 1 要因分散分析 | | ** | ** | ** | ** | | | ** | * | ** | ** | ** | ** |
| 多重比較 テューキー法 ($P < 0.05$) | | C vs P | C vs P | C vs P | C vs P | | | C vs P | C vs F | F vs C | F vs C | M vs C | C vs P |
| | | C vs M | C vs F | C vs F | C vs F | | | C vs F | | F vs P | F vs P | F vs C | C vs M |
| | | C vs F | | C vs I | M vs P | | | C vs I | | | | F vs P | C vs F |
| | | C vs I | | M vs P | | | | | | | | | |
| | | | | M vs F | | | | | | | | | |
| | | | | M vs I | | | | | | | | | |

があった。

C（三者共通）型は、まさに似より感大群の代表者である。プラスイメージが強い。

P（父母接近）型は、自分自身のマイナスイメージが特徴として上げられる。C型の者に比べて内向性と自己顕示性の得点が有意に高く、誠実性と明朗性は有意に低い得点を出している。なお、C型に比して母親では誠実性、父親では明朗性で低得点であった。

M（母子接近）型は、自分自身は内向性でC型より高得点であるが、明朗性はC型について高得点となりP・F・I型との間で有意差を見せている。しかしながら、父親では誠実性と明朗性においてC型との間で差をみせ、低得点となっていた。

F（父子接近）型は、自分自身の4因子と父親の4因子の総てで、また、母親の誠実性と明朗性でC型と有意な差を見せ、マイナスのイメージがかなり強く現れた。父親に似ているという認知は、内向的・自己顕示的で誠実性と明朗性が低いという受け止め方がなされているのである。

I（個性）型は、人数が少ないので差はでにくかったが、それでも自分自身のF1とF3、母親のF3でC型と有意差をみせている。

青年期にある娘にとっての父親認知の心内化の課題が、ここではっきりとその姿をみせてきているように思う。では、どのような形で娘は父親を受け入れていけばよいのだろうか。今のところここでは問題提起しかできそうにない。両親のデータ（特に父親の）を絡ませた娘の詳しい事例分析的研究がこれから求められる。有り難いことには手元にそのデータを持っており、今後その分析は可能なのである。次回の結果を待ちたい。

5. 3つの親子の結びつきと3種の親子の認知タイプ（C型・P型・F型）の関係性

特に人数の多かった3つの認知タイプについて、親子の結びつきをさらに詳しく検討してみることとした（Tab. 7-2）。

親子の似より感と結びつき

Tab. 7-2 3種の結びつきと親子の認知タイプ(C・P・F)を絡ませた3評定対象の因子別平均得点とSD

| 結びつき タイプ | n | 自分自身 | | | | 母親 | | | | 父親 | | | |
|----------------|---------|--|--------------|--------------|--------------|------------------|--------------|--------------|--------------|---------------------------------------|--------------|--------------|--------------|
| | | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 | F1 | F2 | F3 | F4 |
| 父=母 私 | C 22 | \bar{X} 3.03 SD 0.44 | 2.84 0.48 | 3.90 0.35 | 3.97 0.60 | 2.44 0.62 | 2.51 0.56 | 4.22 0.35 | 3.99 0.59 | 2.36 0.65 | 2.80 0.97 | 4.23 0.43 | 4.16 0.62 |
| | P 10 | \bar{X} 3.46 SD 0.53 | 3.30 0.43 | 2.82 0.46 | 3.09 0.50 | 2.33 0.40 | 2.70 0.61 | 3.84 0.31 | 3.73 0.78 | 2.33 0.30 | 2.61 0.68 | 3.82 0.43 | 3.63 0.58 |
| | F 11 | \bar{X} 3.37 SD 0.67 | 3.31 0.54 | 3.25 0.52 | 3.39 0.64 | 2.88 0.58 | 2.91 0.51 | 3.68 0.40 | 3.52 0.53 | 2.94 0.64 | 3.00 0.76 | 3.53 0.57 | 3.35 0.82 |
| | C 11 | \bar{X} 2.80 SD 0.59 | 2.61 0.55 | 3.62 0.34 | 3.97 0.41 | 2.40 0.29 | 2.34 0.48 | 4.05 0.43 | 4.12 0.44 | 2.24 0.33 | 2.59 0.70 | 3.88 0.43 | 3.91 0.61 |
| | P 9 | \bar{X} 3.83 SD 0.41 | 3.31 0.83 | 2.95 0.58 | 2.73 0.78 | 2.44 0.32 | 2.33 0.75 | 3.70 0.35 | 3.68 0.43 | 2.34 0.48 | 2.72 0.82 | 3.78 0.27 | 3.30 0.59 |
| | F 7 | \bar{X} 3.57 SD 0.21 | 3.65 0.36 | 3.04 0.25 | 3.37 0.68 | 2.35 0.52 | 2.57 0.17 | 3.73 0.42 | 3.92 0.20 | 3.08 0.55 | 3.78 0.31 | 3.38 0.33 | 3.06 0.97 |
| その他 | C 6 | \bar{X} 2.82 SD 0.31 | 2.74 0.57 | 3.37 0.63 | 3.57 0.61 | 2.74 0.55 | 2.67 0.81 | 3.83 0.75 | 3.41 0.63 | 2.14 0.77 | 2.46 1.00 | 3.90 0.37 | 3.84 0.69 |
| | P 10 | \bar{X} 3.39 SD 0.33 | 3.39 0.54 | 3.05 0.27 | 3.07 0.42 | 2.43 0.58 | 2.71 0.91 | 3.68 0.69 | 3.28 0.78 | 2.54 0.64 | 2.50 0.87 | 3.64 0.77 | 3.29 0.69 |
| | F 14 | \bar{X} 3.54 SD 0.47 | 3.62 0.57 | 2.90 0.55 | 3.05 0.73 | 2.69 0.52 | 3.18 0.64 | 3.46 0.48 | 3.11 0.67 | 2.81 0.67 | 3.93 0.90 | 2.77 1.00 | 2.95 0.92 |
| | 1要因分散分析 | * ** ** * | | | | ** | | | | * ** ** * | | | |
| | | C vs P C vs P C vs P C vs F C vs F C vs F P vs F | | | | C vs P C vs F | | | | C vs F C vs F C vs F | | | |
| | 1要因分散分析 | ** ** ** * | | | | | | | | ** ** * | | | |
| | | C vs P C vs P C vs P C vs P C vs F C vs F C vs F | | | | | | | | C vs F C vs F C vs F P vs F P vs F | | | |
| 1要因分散分析 その他 | | ** * | | | | | | | | ** * | | | |
| | | C vs P C vs F C vs F | | | | | | | | C vs F C vs F P vs F P vs F | | | |

F(父子接近)型の独特さがさらに明瞭になってくる。3種の結びつきのいずれにおいても、自分自身と父親の認知でC型・P型と大きな差を示している。マイナス的なイメージの父親に自己を似よらせた娘は、苦勞しているのだろうか。それとも、たたき台として今ここ(而今)で人格改造に励んでいるのだろうか。三者間の結びつきが強い人の場合、F3誠実性で有意な差はあるが、その他の性格では母親の認知に差を見い出せない存在者なのである。

6. 親子の結びつきと自己意識(時間軸と空間軸からみた自己の定位)について

ここでは、親子の似より感と絡ませながら、以前分析した自己意識をこの3種の結びつきの中で捉えようと思う。これまでに明らかにした結果を新しい分析にもう一度重ね合わせることで、この一連の研究の信頼性をさらに確実なものにするためである。

まずは、似より感3群における自己意識の状況を表しておこう(Tab. 8-1)。

時間軸からみた自己の定位:「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」において似より感大群は中・小群に比べて有意に得点が高い。今と未来における自分をより積極的に受け止めている者と言えよう。空間軸からみた自己の定位:自己受容と他者受容でやはり有意に高得点をだしている。ここでも、秋山(2001)の結果を裏付けることができています。

Tab. 8-1 親子の似より感3群と自己意識（時間軸 / 空間軸）

| 自己意識 似より感 群 n | | 時間軸にそった自己の定位 | | | 空間軸にそった自己の定位 | | |
|---------------------|-----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| | | 過去の 危機 | 現在の 自己投入 | 将来の自己 投入の希求 | 自己受容 | 自己防衛 | 他者受容 |
| 大 | 71 | \bar{X} 16.9 | \bar{X} 16.6 | \bar{X} 17.4 | \bar{X} 3.16 | \bar{X} 4.04 | \bar{X} 4.16 |
| | | SD 3.2 | SD 3.2* | SD 2.3* | SD 0.74 | SD 0.75 | SD 0.76* |
| 中 | 78 | \bar{X} 16.9 | \bar{X} 14.5 | \bar{X} 15.9 | \bar{X} 2.92 | \bar{X} 4.12 | \bar{X} 3.75 |
| | | SD 3.6 | SD 3.6 | SD 2.7* | SD 0.72 | SD 0.76 | SD 0.77 |
| 小 | 75 | \bar{X} 16.5 | \bar{X} 14.1 | \bar{X} 15.0 | \bar{X} 2.70 | \bar{X} 4.09 | \bar{X} 3.57 |
| | | SD 3.1 | SD 3.4 | SD 2.4 | SD 0.72 | SD 0.64 | SD 0.85 |
| 全体 | 224 | \bar{X} 16.8 | \bar{X} 15.0 | \bar{X} 16.1 | \bar{X} 2.92 | \bar{X} 4.08 | \bar{X} 3.82 |
| | | SD 3.3 | SD 3.6 | SD 2.7 | SD 0.75 | SD 0.72 | SD 0.83 |

Tab. 8-2 は、娘の自己意識の得点が親子の結びつきでみた場合どのように違ってくるかを示したものである（似より感3群も組み込んでみた）。

Tab. 8-2 3種の親子の結びつきをベースにしてみた似より感3群と自己意識の出入

| 自己意識 結びつき 群 n | | | 時間軸にそった自己の定位 | | | 空間軸にそった自己の定位 | | |
|------------------|---|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| | | | 過去の 危機 | 現在の 自己投入 | 将来の自己 投入の希求 | 自己受容 | 自己防衛 | 他者受容 |
| 父=母 私 | 大 | 44 | \bar{X} 17.3 | \bar{X} 16.9 | \bar{X} 17.8 | \bar{X} 3.10 | \bar{X} 4.11 | \bar{X} 4.21 |
| | | | SD 3.2 | SD 3.5* | SD 2.4* | SD 0.83 | SD 0.78 | SD 0.73* |
| | 中 | 39 | \bar{X} 16.7 | \bar{X} 14.4 | \bar{X} 15.3 | \bar{X} 2.90 | \bar{X} 4.18 | \bar{X} 3.80 |
| | | | SD 4.1 | SD 3.8 | SD 2.7 | SD 0.75 | SD 0.80 | SD 0.84 |
| | 小 | 22 | \bar{X} 17.1 | \bar{X} 14.6 | \bar{X} 16.1 | \bar{X} 2.72 | \bar{X} 4.03 | \bar{X} 3.76 |
| | | | SD 3.2 | SD 3.6 | SD 2.5 | SD 0.89 | SD 0.72 | SD 0.94 |
| 父=母 私 | 大 | 18 | \bar{X} 16.0 | \bar{X} 15.9 | \bar{X} 16.3 | \bar{X} 3.29 | \bar{X} 3.94 | \bar{X} 4.06 |
| | | | SD 3.1 | SD 2.9 | SD 2.0 | SD 0.56 | SD 0.68 | SD 0.75 |
| | 中 | 19 | \bar{X} 16.5 | \bar{X} 14.5 | \bar{X} 16.5 | \bar{X} 2.94 | \bar{X} 4.32 | \bar{X} 3.79 |
| | | | SD 2.9 | SD 3.0 | SD 2.4* | SD 0.48 | SD 0.55 | SD 0.61 |
| | 小 | 26 | \bar{X} 16.0 | \bar{X} 13.7 | \bar{X} 14.5 | \bar{X} 2.69 | \bar{X} 4.17 | \bar{X} 3.44 |
| | | | SD 2.6 | SD 3.1 | SD 1.7 | SD 0.57 | SD 0.59 | SD 0.73 |
| その他 | 大 | 9 | \bar{X} 17.1 | \bar{X} 16.6 | \bar{X} 17.8 | \bar{X} 3.21 | \bar{X} 3.91 | \bar{X} 4.11 |
| | | | SD 3.5 | SD 2.2 | SD 2.0 | SD 0.50 | SD 0.73 | SD 0.87 |
| | 中 | 20 | \bar{X} 17.4 | \bar{X} 14.6 | \bar{X} 16.4 | \bar{X} 2.92 | \bar{X} 3.82 | \bar{X} 3.62 |
| | | | SD 3.0 | SD 3.8 | SD 2.8* | SD 0.82 | SD 0.76 | SD 0.72 |
| | 小 | 27 | \bar{X} 16.6 | \bar{X} 14.1 | \bar{X} 14.5 | \bar{X} 2.70 | \bar{X} 4.06 | \bar{X} 3.54 |
| | | | SD 3.4 | SD 3.4 | SD 2.5 | SD 0.68 | SD 0.62 | SD 0.85 |

現在の自己投入は、「三者の結びつきが強い」においてのみ似より感大群が他の2群に比して高得点であった。「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」や「その他」では差がでてこなかった。将来の自己投入の希求では、3種の結びつき方の総てで似より感分析の結果と同じ差が得られた（大群の希求が高いのである）。自己受容では、「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」においてのみ、また、他者受容は、「その他」を除いた2種の結びつきで差をみせ、いずれにおいても大群が高得点をみせている。

ここで、もう一度「その他」をさらに両親の結びつきが「強い」と「弱い」に分け、自己意識との関係を調べた（Tab. 8-3）。両親の結びつきが「強い」場合にのみ3つの自己意識で差が出てきた（自己防衛で差が出たのは初めてであった。中群 vs 小群 = 3.55 vs 4.35）・似より感小群では、両親の結びつきが「強い」と「弱い」の間にも有意な差があった（強い・小群 vs 弱い・小群 = 4.35 vs 3.80）。

親子の似より感と結びつき

Tab. 8-3 親子の結びつき「その他」(2種)からみた似より感3群の自己意識の出方

| 「その他」 両親の 結びつき 群 | 自己意識 n | 時間軸にそった自己の定位 | | | 空間軸にそった自己の定位 | | |
|------------------------|-----------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|---------------|---------------|--------------|
| | | 過去の 危機 | 現在の 自己投入 | 将来の自己 投入の希求 | 自己受容 | 自己防衛 | 他者受容 |
| 強い | 大 5 | \bar{X} 17.6 SD 4.0 | \bar{X} 15.8 SD 1.9 | \bar{X} 17.4 SD 2.2 | 2.95 0.35 | 3.83 0.73 | 3.87 0.88 |
| | 中 9 | \bar{X} 17.2 SD 2.7 | \bar{X} 15.3 SD 3.8 | \bar{X} 16.0 SD 1.4* | 3.10 0.46* | 3.55 0.56* | 3.48 0.61 |
| | 小 13 | \bar{X} 16.8 SD 3.3 | \bar{X} 13.5 SD 3.5 | \bar{X} 13.5 SD 2.4 | 2.47 0.56 | 4.35 0.56 | 3.31 0.82 |
| 弱い | 大 4 | \bar{X} 16.5 SD 2.7 | \bar{X} 17.5 SD 2.1 | \bar{X} 18.3 SD 1.6 | 3.54 0.46 | 4.00 0.72 | 4.42 0.76 |
| | 中 11 | \bar{X} 17.5 SD 3.1 | \bar{X} 14.0 SD 3.7 | \bar{X} 16.6 SD 3.5 | 2.78 1.00 | 4.03 0.83 | 3.73 0.79 |
| | 小 14 | \bar{X} 16.3 SD 3.3 | \bar{X} 14.8 SD 3.1 | \bar{X} 15.4 SD 2.4 | 2.91 0.73 | 3.80 0.57 | 3.76 0.82 |

7. 親子の結びつき・自己意識・親子の似より感を総て絡ませてみた場合

ここでの結びつきは、「その他」を両親の結びつきが「強い」と「弱い」の2つに分け、4種とする。自己意識のうち、時間軸からみた自己の定位では過去の危機（平均値以上をH、未満をL）と現在の自己投入（HとL）を取り上げ、HH・LH・HL・LLの区分けを行う。この4×4の表の中に、さらに空間軸からみた自己の定位である自己受容（hとl）と自己防衛（hとl）を組み合わせた、hh・hl・lh・llの欄を設ける。このようにして出来上がった64のマスの中に、各々の条件を満たした人数を3つの似より感（3群）別に振り分けていった。その結果が、Tab.9なのである。

Tab. 9 4種の結びつきと自己意識（時間軸による4組）のマトリックス表

—似より感3群別にみた空間軸による自己の定位の出現人数—

| | | 過去の危機 H | | | | 過去の危機 L | | | | 過去の危機 H | | | | 過去の危機 L | | | |
|--------------------------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 結びつき | | 現在の自己投入 H | | | | | | | | 現在の自己投入 L | | | | | | | |
| | | <u>hh</u> | <u>hl</u> | <u>lh</u> | <u>ll</u> | <u>hh</u> | <u>hl</u> | <u>lh</u> | <u>ll</u> | <u>hh</u> | <u>hl</u> | <u>lh</u> | <u>ll</u> | <u>hh</u> | <u>hl</u> | <u>lh</u> | <u>ll</u> |
| 父=母 私 | 大 44 | 4 | 7 | 6 | 2 | 大 2 | 9 | 1 | | 大 3 | 0 | 3 | 3 | 大 1 | 2 | 0 | 1 |
| | 中 39 | 2 | 4 | 5 | 3 | 中 2 | 3 | 1 | | 中 2 | 1 | 3 | 3 | 中 0 | 4 | 5 | 1 |
| | 小 22 | 1 | 2 | 3 | 1 | 小 0 | 2 | 2 | | 小 0 | 1 | 3 | 1 | 小 0 | 1 | 2 | 2 |
| | 105 | 40 | | | | 22 | | | | 23 | | | | 20 | | | |
| 父=母 私 | 大 18 | 1 | 4 | 2 | 0 | 大 2 | 4 | 1 | 0 | 大 1 | | 0 | 0 | 大 1 | 1 | 0 | 1 |
| | 中 19 | 1 | 2 | 2 | 1 | 中 0 | 2 | 1 | 1 | 中 0 | | 3 | 0 | 中 4 | 0 | 1 | 1 |
| | 小 26 | 1 | 1 | 3 | 1 | 小 1 | 2 | 1 | 0 | 小 0 | | 3 | 1 | 小 1 | 2 | 4 | 5 |
| | 63 | 19 | | | | 15 | | | | 8 | | | | 21 | | | |
| その他 両親の 結びつき 強い | 大 5 | 1 | 0 | 0 | 2 | 大 0 | 0 | | 1 | 大 0 | 0 | 0 | | 大 1 | | 0 | 0 |
| | 中 9 | 0 | 3 | 0 | 1 | 中 1 | 0 | | 0 | 中 2 | 0 | | | 中 0 | | 0 | 2 |
| | 小 13 | 0 | 0 | 1 | 1 | 小 1 | 1 | | 1 | 小 0 | 3 | | | 小 1 | | 4 | 0 |
| | 27 | 9 | | | | 5 | | | | 5 | | | | 8 | | | |
| その他 両親の 結びつき 弱い | 大 4 | | 0 | 0 | 1 | 大 1 | 2 | | | 大 | | 0 | 0 | 大 | | 0 | 0 |
| | 中 11 | | 1 | 1 | 0 | 中 0 | 3 | | | 中 | | 4 | 0 | 中 | | 1 | 0 |
| | 小 14 | | 3 | 1 | 0 | 小 1 | 2 | | | 小 | | 0 | 3 | 小 | | 1 | 2 |
| | 29 | 7 | | | | 9 | | | | 7 | | | | 6 | | | |

hh・hl/lh・ll: (前)自己受容 (後)自己防衛

この分類法（分析法）は、2000年から続けてきているやり方である。自己意識を絡ませてみると、簡素な描画法である家族イメージ法から取り出した親子の結びつきではあるが、親子の似より感3群と密接な関係を保っていることが読み取れる。これは、かなりの手応えである。簡単な描画による家族の結びつき認知なのに、親子の似より感3群との間にかかなり高い相関関係をみせるのである。それがまた、はっきりとした形で自己意識の受け止め方の違いとも絡み合って現れてきている。

まずは、現在自己投入をしていると感じ取っている学生に目を向けてみよう。自己受容が高く自己防衛は低いと見なす学生は、大群：26名、中群：18名、小群：13名（計57名、全体からみた占有率25.4%）という出方である。出現人数は少なくなるけれども、この特徴を維持しているのが自己受容（h）・自己防衛（h）であると自分を認知している人たちである（大11名、中6名、小5名／計22名、占有率9.8%）。一方、現在の自己投入が低いとみなす者では、自己受容（l）・自己防衛（h）の出方が上記の者と比べて逆になる（大群：3名、中群：17名、小群：21名／計41名、全体でみた占有率18.3%）。やはりこのような特徴をみせるのは、人数は少ないが、自己受容（l）・自己防衛（l）であった（大5名、中7名、小13名／計25名で占有率11.2%）。4組を合わせると2/3の出現となる。

今度は、親子の結びつきに焦点を当てながら読み取ってみよう。「三者間の結びつきは強い」と「両親の結びつきは強いが、父親とは弱い」を見比べた時、その出現の仕方はかなり似かよっていると言える。

以上の分析からは、これまでの一連の研究の信頼性をさらに高める貴重な諸結果が、この度も得られたという思いが強く湧いてくる。

コツコツとではあったが、データを積み重ねながら結びつけていくというこれまでの努力は、家族の人間関係の認知に関する新しい視点を切り開いてきていると言えよう。この世に生を受け、家庭の両親に見守られながら、この20年間を自分なりにただ一筋に歩み続けてきている娘達を研究の対象者として見据えた時、心の内に形成してきた親子の似より感の受け止め方の違いもまた、今の自己の認知や他者認知に大きな影響を与えている（与えてきている）という事実がその姿を明かしてくれているように思う。30年以上にわたる息の長い（息の切れそうな）この研究の継続は、何の成せる仕業なのだろうか。61年の人生の半分以上を捧げてきたこの研究の意義は、これからどのような果実として実り、熟し、種子化するのであろうか。

家族システム論を越える考え方の抽出に向けての始動

「親子の似より感」に関わる一連の研究の積み上げは、確かに家族関係におけるある真実の一面に触れているという実感をさらに強いものにした。“家族の背景にあるものが、一つの物差しで測れる”とはまったく考えていない。永年にわたり自然（じねん）が社会・文化が創り上げてきた地道な営みは、複雑に絡み合いながら今に辿り着いた驚異的なものである。数百年の歴史をもつ科学的アプローチでもって発見できた事は、この世に存在する真実の一部を切り取り、そのバランスを失わせながら手にしたものには過ぎないのではあるまいか。今、地球は病み始めている。社会においても驚くべき出来事がこれでもかこれでもかと報道されるようになってきた。この苦しみ状態が今は底を打ち、これからはよりよい状態に向かう時期に辿り着いてきていると推測したい。マイナ斯的に絶望するのではなく、少しでも明るい近未来を夢見たいのである。

確かに、システム理論に基づく仮説の検証はスマートである。しかし、そんなに命のかかわり方は簡単なものなのだろうか。単に境界膜だけの操作で片づくのだろうか。以前指摘したことなのだが、親子の間で擦れ違った感情や認知は、年を重ねるにつれて膨らんでいく。意識の場が捉えた無意識という世界の中にも深く沈み込んでいくとも言われる。しかしながら、時と場が適切でさえあればある人間関係の包容によって案外簡単に問題が解決することもしばしばある。表向きのマイナスの進行と同時にプラスの進行も潜在下では行われていて、それが熟して時とチャンスさえあれば、閾値を超えて現実のものとなるのではなかろうか。ある治療方法が問題を解決させたという受け止め方ではなく、時間を掛けながらその人が発達的に潜在下で育んできたものを表に出したのであり、治療者はその手助けをしたのだと考えてみたいのである。人間もまた自然（じねん）的存在なのである。禅僧であった故内山老師は、ナマに生命体験する自己とナマに生命体験される世界を別々に捉えるのではなく、同時に一緒に込みにして考える『それぐるみの自己』という概念を50歳の頃公にした。この考え方に触れて約30年近くになるが、やっと今身近に感じ取れるようになってきた。青年期にある娘の、また壮年期にある母親の今ここでの心の状況を探るということは、一つの自己意識だけで推測できるものではなく、煩雑にはなっても親子の似より感を構成する諸データを走査させながら、もちろん身近に語り合いながら導きだすものであろう。早坂（1994）が25年間かけて掘み取った「関係性」に近いアプローチでもある。臨床心理学的な手法の応用だけではなく、現象学的視点（ヴァン・デン・ベルク流の）や発達臨床学的視点をも取り入れながら、家族や社会の問題・トラブルに対処していきたいものである。

この一年の学びの蓄積は、村瀬（2001）、多田・南（2001）、河合・中沢（2003）、養老（2003 a, b）とひろ（2003）からである。これまで「仕掛けて待つ」ということを言い続けてきた（この仕掛けて待つは、平井信義からの学びがベースである）。この心構えと心配りを、養老のキーワードである『手入れ』と関係づけながら新しい家族関係の捉えの土台作りをしてみたい。さらにそれを他の人達の見方と結びつけ考えてみたい。

1. 養老の「手入れ」概念について

養老は、荒れ果てている里山の復活はこの手入れにしかないと見ている。里山は、刻々とその姿を変える複雑なシステムを蔵している。「手入れ」とは、バランスを崩しやすいこの里山のシステムに、加減を見ながら手を加え、さらに強固なものにしていくことだ（p.101～102）と言うのである。「相手（ここでは里山）を自分の脳を越えたものとして認め、できるだけ相手のルールを知ろうとする。これが自然とつきあうときのいちばんもっともなやり方だと思う。手入れはできてもコントロールはできないのである。」彼の環境論は、人間が自然を相手にするとき、理解できる部分はコントロールし、理解を越えた部分には目をつぶってきたとみている。これを一言でいえば、相手に対する謙虚な姿勢がなかったというのである。「手入れ」の出発点は、相手を認めることにある。自分と同格のものとして認める。自分が手を入れたら、相手がどのように反応するかを知らなければならない。.... 自然を知るためにあれこれ努力し、長い時間にわたって辛抱し、それでもやがては変わると頑張る根性をもつことが要求される（p.102～106より抜き出しながらの引用）というものである。家族の維持・発達にもこのことは言えるはずである。家庭は、手を入れながら時間をかけて積み重ねていく努力と根気がある人間関係の発達の場合なのである。仕掛けて待つという気の長い取り組み・かかわりが、構成員の間で求められ続ける自然・社会の営みと同じ一つの現れなのである。家族の関係は、マニュアル化できるほど単純なものではない。養老的に考えれば、それはコントロールするもの

ではなく、時々刻々の「手入れ」が必要なのである。焦ることなく気長に付き合っていく存在者同士の認め合いの素晴らしい創造体験の場なのである。

2. 村瀬の「構造的カップリング」の考え方について

村瀬は、「生命体は、すでに決められているものだけではなく、さまざまな状況（カップリング）の中でさまざまな可能なかぎりの組み合わせを案出することで創造されていくものである（p.231）。」と読み取る。この「構造的カップリング」は、一つでありながら二つとして、つまり「一つが二つ」「二つが一つ」として、絶えず構造的にカップリングされて成立している。この地球上に生きている生き物は、生きているという構造であろうとすれば必ず「何ものかとのカップルの構造」になっていなければならない。これは、環境とのカップルとか歴史とのカップルとかいうように、絶えず周りの出来事との相互性を生きる構造として成り立っているというイメージとなる（p.233）。常に周りをとりこみ、自らも周りの一部になる。そういう構造的な相互性である。だから、一つの構造があるのではなくてカップルとなりつづける構造が存在すると、彼は言うのである。「いのち」はいつでも、どんなものでも「カップリングとしてのデザイン体」なのであるという見方がここにはある。社会も家庭も彼の主張する「いのち」の現象と捉え直し考察してみることに、大きな意味がありそうである。

3. 多田の免疫学における「あいまい性」のもつ意義について

免疫学を確立させた学者の一人である多田富雄は、南伸坊を生徒にしてその学問の成果を熱っぽく語りかけている。「あいまい性」こそが、生命をしなやかで強靱なものにしているのである。... さらに、生命のシステムには従来のシステム論で説明できない部分があるとも述べている。免疫の場合は、初めから多様な要素はなく造血幹細胞という単一の細胞があり、それが赤血球になったり白血球になったり免疫系のさまざまな細胞になって、最終的に非常に多様で、自分以外のものを認識して反応し、しかも自己を守るシステムをつくっていく（p.167）のだそうである。初めから全体が決定されているのではなくて、自分で自分をつくり出すというプロセスである。これも、親子の似より感形成には十分当てはまり、納得のいく考え方のように思われる。

4. 中沢のまとめた「ヴァーチャル」という概念

「あいまい」の知というテーマで、国際日本文化研究センターはシンポジウムを1999年に行った。その記録をもとにした一冊の本の中で中沢新一は、物質の世界の新しい認識法の特徴をとりだしている。①「ヴァーチャル virtual」という概念は、たんなる観念的な描像でもなければ、抽象的な想像物でもなく、明確な具体性をもっている。すなわち、量子論があつかう時空は、「ヴァーチャル」な時空として、潜在的な可能性を内蔵した具体的な時空なのである。その「ヴァーチャル」な時空に内蔵された潜在性が現実体 actual に変わるとき、物理的に観察可能な事象が出現する。量子論はその観察可能な物理量だけから「ヴァーチャル」な時空の仕組みを推理するのである。②量子論的な事象は、つねにものごとの総体をあつかうことができない。それを、局所的に孤立した出来事としてあつかおうとすると、かならずその理論は破綻する。個体におこる変化はつねに全体の変化を呼び起こし、個体は全体との照応関係のなかではじめて決定されるのである（p.33）。以上がそのまとめの一部なのである。人生の第③段階における「空（くう）からくるエネルギー」というテーマで取り組み始めた考察と深く関わり合う概念である（2003b）。

5. ひろによる「空海：真言密教」の読み取り

これをひろさちやの空海（真言密教）の読み取りによって言い替え直してみよう。ブッダになったつもりで自分の人生を生きるのである。あるいはブッダのまねをして生きるのです。それがブッダとしての生き方です。... いつでも「いま・ここ」を楽しむ、大切にするのである。方便というあり方で仏道修行を行うのが、密教である。結果にこだわらないでプロセスを大切にするのが、豊かな人間の生き方であり、たとえ目標に到達できなくても、一步一步、歩んでいくのです。その歩みそのものが、素晴らしいのです。「目的を超越せよ、目的にこだわるな、プロセスを大切にせよ。」これこそが、方便の思想であり、密教の大切な考え方であると、彼は分かり易く噛み砕いて語ってくれている。

ここで取り上げまとめ上げたものは、これまでの考察とどう結びつき、これからの新しい考えとしてどのように展開していくのだろうか。「〈私〉は、他者とズレることを受け入れながら、やがてそれをも突き抜けて《私》となり、自然（じねん）と再び新しい出会いを成し遂げ、大いなる似よりに到達したい」という目標がある。しかしこの目的にこだわらず、今の自分（〈私〉を心の内に抱えた）は一人の雲水として、その半歩のプロセスをこれからも歩み感じ取り続けていきたい。

文 献

- 秋山幹男 1974 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 8 23-38
 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について (2) —4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 15 45-74
 秋山幹男 1981 女子学生における自己と父母の認知について (3) —タイプ分析の試み— 広島文教女子大学研究紀要 16 61-72
 秋山幹男・有馬道久 1985 女子学生における自己と父母の認知について (4) —因子別得点をもちいたクラスター分析の試み— 広島文教女子大学紀要 20 57-68
 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について (5) —三者間の似よりにもとづく分析— 広島文教女子大学紀要 23 (人文・社会科学編) 83-102
 秋山幹男 1992 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
 秋山幹男 1993 親子の似よりと自己受容について—女子学生における理想自己と現実自己のズレ— 広島文教教育 7 29-48
 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
 秋山幹男 1995 親子の似よりと家族イメージ・エゴグラム 日本性格心理学会第4回大会発表論文集 100-101
 秋山幹男 1997 親子の似より（感）の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
 秋山幹男 1998 「内なる他者」を見つめる目 広島文教女子大学紀要 33 103-117
 秋山幹男 1999 女子学生とその両親が捉えた性格の相互認知—似より感とズレ感をもとにした分析— 広島文教女子大学紀要 34 41-54
 秋山幹男 2000 若い母親の養育態度と親子（幼児）の性格認知—実父母との似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 35 113-126
 秋山幹男 2001 時間軸と空間軸からみた自己の定位—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 36 63-82
 秋山幹男 2002 心理学的健康と時間軸にそった自己意識—女子学生の親子の似より感をベースにして— 広島文教女子大学紀要 37 145-163
 秋山幹男 2003a 成人における実父母との似より感—女子学生をもつ母親と父親について— 広島文教女子大学紀要 38 165-182
 秋山幹男 2003b 空（くう）からくるエネルギーとは何か 広島文教女子大学心理教育相談センター 11

- エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1977/1980 幼児期と社会 I・II みすず書房 Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society* W.W. Norton & Company, Inc.
- フランクル, V. E. 諸富祥彦監訳 上嶋洋一・松岡世利子訳 1978/1999 〈生きる意味〉を求めて 春秋社 (*The Unheard Cry for Meaning*)
- フランクル, V. E. 大沢博訳 1972 意味への意志 プレーン出版 Frankl, V.E. 1969 *The Will to Meaning* Charles E. Tuttle Company, Inc.
- Glick, I.D. & Kessler, D.R. 1974 *Marital and Family Therapy* Grune & Stratton New York (岡堂 1983 より)
- 早坂泰次郎 1994 〈関係性〉の人間学 川島書店
- ひろさちや 2003 ひろさちやの「空海」を読む 俊成出版社
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 (第3版) 東京大学出版会
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教心研 31 292-302
- 河合隼雄 1978 ユングの生涯 第三文明社
- 村瀬 学 2001 哲学の木—いのちの寓話— 平凡社
- 諸富祥彦 1997 フランクル心理学入門—どんな時も人生には意味がある— コスモス・ライブラリー
- 中沢新一 2003 マトリックスについて—華嚴経・量子論・心理学— 河合隼雄・中沢新一 「あいまい」の知 岩波書店
- 岡田恵美子 2002 女子青年における心理的離乳と親子関係との関連について 広島文教女子大学大学院文学研究科教育学専攻修士論文 (未発表)
- 岡堂哲雄 1983 家族への心理的援助—その理論と技法に関する基本的枠組み— 日本家族心理学研究会編 家族臨床心理の展望 家族心理学年報 1 19-43 金子書房
- 柴田豊子 1991 青年期の家族と自己評価に関する研究 広島文教女子大学文学部初等教育学科心理専修卒業論文 (未発表)
- ラッシュェル, ベイカー 宮城音弥訳 1975 フロイトその思想と生涯 講談社
- 下井奈美 2003 親子の性格の類似性が家族関係に及ぼす影響について 広島文教女子大学文学部初等教育学科心理学コース卒業論文 (未発表)
- 多田富雄・南仲坊 2001 免疫学個人授業 新潮社
- 内山興正 1969 進みと安らい—自己の世界— 柏樹社
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- 内山興正 2004 自己—ある禅僧の心の遍歴— 大法輪閣 (1965 柏樹社の復刻本)
- ヴァン・デン・ベルク 早坂泰次郎 1982 現象学への招待 川島書店
- 養老孟司 2003 いちばん大事なこと—養老教授の環境論— 集英社
- 養老孟司・茂木健一郎 2003 スルメを見てイカがわかるか! 角川書店

資料

資料1

親子の似より感調査の性格項目

- F1. 内向性 (12項目):** しょげやすい 臆病な 感傷的な (オセンチな) 意志の弱い 甘えた ロマンチックな 行動力のある (-) 他人を気にする 指導力のある (-) スケールの大きな (-) 内気な 服従的な
- F2. 自己顕示性 (9項目):** 利己的・自己中心的な 支配欲の強い 強がり うぬぼれの強い わがままな ひねくれた 頑固な 虚栄心の強い 粗暴な
- F3. 誠実性 (14項目):** 礼儀正しい ねばり強い 几帳面な ひたむきな ものを深く考える 包容力のある 正義感の強い 献身的な 親切的な やさしい なげやりなところのある (-) 無責任な (-) あきっぱい (-) 調和のとれた
- F4. 明朗性 (7項目):** 明るい ユーモアのある 友人の多い さっぱりした 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ 孤独な (-)
- その他 (6項目):** しつと深い 不安定な 神経質な (線の細い) 疑い深い (不信の) (毎日の生活に) 生きがいを感じる 素直な

資料 2

自己形成（時間軸からみた自己の定位）：加藤（1983）の同一性ステイタスの項目

過去の危機

- ・私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのか、ということをもって真剣に迷い考えたことがある。
- ・私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある。
- ・私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことがない。（－）
- ・私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない。（－）

現在の自己投入

- ・私は今、自分の目標をなしとげるために努力している。
- ・私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている。
- ・私には、特にうちこむものはない。（－）
- ・私は、「こんなことがしたい」という確かなイメージを持っていない。（－）

将来の自己投入の希求

- ・私は、一生けんめいにうちこむものを積極的に探し求めている。
- ・私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能性を持ちそれを比べながら、真剣に考えている。
- ・私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない。（－）
- ・私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない。（－）

資料 3

自己意識（空間軸からみた自己の定位）：梶田（1988）の項目を菅野（1989）が因子分析

F1 自己受容：

- ・私は、自分を頼りないと思うことがある。（－）
- ・私は、人より劣っていると感じることもある。（－）
- ・私は、現在の自分に満足している。
- ・私は、時々自分自身がいやになるときがある。（－）
- ・私は、他の人にくらべて能力などの点ですぐれていると思う。
- ・私は、他の人をとてもうらやましく思う。（－）
- ・私は、今のままの自分ではいけないと思うことがある。（－）
- ・私は、自分に自信をもっている。

F2 自己防衛：

- ・私は、人からどんなうわさをされているか気になる方である。
- ・私は、自分が少しでも人からよく見られたいと思うことがある。
- ・私はよく、小さなことをくよくよと考える。
- ・私は、人にいつも見られていると感じるときがある。
- ・私は、自分が傷つくことを恐れている。
- ・私は、何かをしようとするとき、他の人が反対するのではないかと心配になることがある。

F3 他者受容：

- ・私は、人とうまく付き合っていける方である。
- ・私は、人を全面的に信じることができる。
- ・私は、自分の心を素直に表現できる。

—平成 16 年 10 月 8 日 受理—